St. Luke's International University Repository

# 学術活動報告(1998年度)



| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2007-12-26<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者:<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | http://hdl.handle.net/10285/356 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

# 学術活動報告（1998年度）

## WHOプライマリーヘルスケア看護開発協力センター

〈今年度の活動〉

**1．グローバルネットワーク**

1）第9回グローバルネットワークミーティングへの参加（4月）

1998年4月27～28日に，韓国Kyongjuで行われた第9回WHO Collaborating Center for Nursing and Midwiferyグローバルネットワークミーティングに，菱沼センター長と小山教授を派遣した。当センターは，グローバルネットワークの事業のうち，Health of PopulationのHealth Assessmentに関する活動にエントリーした。

2）第2回International ConferenceにおけるEXPO NURSING EDUへの参加およびシンポジストの派遣（4月）

1998年4月29～30日に，第9回グローバルネットワークミーティングと併せて開催された第2回International Conferenceにおいて，EXPO NURSING EDUに，当センターから，助産婦教育を紹介するブースを出展した。また，シンポジストとして聖路加国際病院の川名典子氏を派遣した。

3）Cooperative Project活動

これまで当センターの活動に際し協力機関であった国立公衆衛生院公衆衛生看護学部，東京大学医学部健康科学・看護学科の辞退の申し出を受け，今年度より，千葉大学看護学部との協力関係をこれまでどおり継続していくこととなった。

今年度はセンターとしての任務の更新時期にあたり，7月にWPROのDr. S. T. Hanより正式に承認する文書が届いた。今期の当センターの活動目標を明記したリーフレットを作成し，送付した。

4）その他

12月に入り，Chief Scientists for Nursingの人事に関する知らせを受けた。

Dr. M. J. Hirschfield の Director of the Division of Human Resource Development and Capacity Buildingへの昇進に伴い，Chief Scientists for Nursingの後任にDr. N. Al-Gasseer（バーレーン出身，WHO Technical Officer in Training and Curriculum Development in Reproductive Health and Family Planning for the United Nations Population Fund（UNFPA）Country Support Team for Arab States and Europe in Jordan）が1999年1月中旬から着任する予定であるとの知らせを受けた。

**2．活動報告書（Annual Report）の作成・配付（8月）**

当センターの活動報告の8巻目として，1997年4月～1998年3月までの活動報告を8月に作成し，国内関連省庁および看護大学67ケ所，国外関係機関39ケ所に配付した。

**3．研究活動**

看護の質の確保に関する研究（平成10年度厚生科学研究費補助金・医療技術評価総合研究事業）

日本における看護実践や看護教育を踏まえ，プライマリヘルスケアの看護モデルを開発し，プライマリヘルスケアの推進をはかることを目的とする研究活動が始まった。そのため，今年度は海外のプライマリヘルスケアにおける看護に関する文献検討を行った。

**4．その他**

1）情報活動

(1) 雑誌『看護』に国内向けのWHO関連情報を提供する「WHO通信」連載開始（9月・11月）

(2) E-mailによるGlobal Network事務局（マンチェスター），WPRO（マニラ）への国内看護情報の発信（11月）

(3) 日本科学学会第3回国際看護学術集会においてインフォメーション・エクスチェンジ（9月）
ミニシンポジウム「日本における看護の継続教育－看護の質の確保に向けて」を開催

2）視察

3月にRegional Adviser in NursingのDr. S. Ruthによる本学WHOセンターの視察を受けた。

（センター長：菱沼　典子
委　　員：森　明子，久代和加子，片桐麻州美，成瀬和子，酒井禎子）

# WHOセンター長会議報告

第9回WHO看護開発協力センター長会議が，4月27日から28日に，韓国のキョンジュで開催された。WHO本部看護専門官Dr. Hirschfeld，各地区担当看護専門官，国際看護協会（ICN）会長，国際助産婦協会（ICM）会長，そして各センターから代表者およびオブザーバーが出席した。本センターからは，菱沼典子，小山眞理子（聖路加看護大学），草刈淳子，斉藤和子，井上智子（千葉大学看護学部）が出席した。Global Network事務局ならびに西太平洋地区の事務局を務めていた韓国の延世大学看護学部が中心となり，Dr. Mo-Im Kimが議長となって会議が進められた。

第8回の議事録報告，WHO本部看護専門官の報告，各地区担当看護専門官からの報告，ICNからの報告，ICMからの報告に続き，Global Networkの94-98年の各事業報告がなされた。その後，今後4年の活動方針が討議され，次期事務局の選任や名誉会員基準などの議事が執り行われた。

今後の活動課題としては，1）各地域各年齢層における健康問題への取り組み，2）看護研究や教育に関する人材資源の開発，3）センター活動の向上を促進すること，が挙げられた。本センターは1）のヘルスアセスメントの開発事業に参加することとした。

また次期事務局は英国のマンチェスター大学に決定し，2000年に第10回センター長会議並びに研究集会が行われることになった。また第11回センター長会議並びに研究集会は米国イリノイ大学で行われる予定である。なお本センターが属する西大西洋地区の事務局はフィリピン大学に移管し，次期は本センターが引き受けることが決定した。

センター長会議の後，国際研究集会が3日間にわたって開催され，本学や聖路加国際病院から発表がなされた。

（センター長：菱沼　典子）

# オリエンテーションセミナー／FD（Faculty Development）委員会

オリエンテーションセミナーとFD（Faculty Development）関係，そして新入スタッフへのオリエンテーションなどについて3人で担当している。

**【オリエンテーションセミナー関係】**

オリエンテーションセミナーは，1999年4月に入学する学生が，よりスムーズに大学生活を出発することを目的としている。準備は，これまでの委員会の申し送りを手がかりに，本年4月から，企画・連絡・運用・冊子の作成などと準備をすすめている。企画には，かつてオリエンテーションセミナーを経験した現1年生から4年生の学生ボランティアと自治会「力」も借りている。

日時：1999年4月8日(木)～9日(金)　1泊2日

場所：社会保険桜上水研修所（東京．世田谷区）

**【FD関係】**

教員の教育・研究に必要な専門的能力を維持・改善するために，研修会や講演会の企画にあたっている。

［研修会］

今年は，1995年に統合（改訂）カリキュラムがスタートし，そのカリキュラムで学習した学生達が卒業する年である。したがって，カリキュラムの見直しと評価を含め，よりよい改善に向けての取り組みへの努力は，カリキュラムを運用している教員当事者に課せられた課題である。

研修会のテーマは，「ファカルティーのキャリアやニーズに応じたカリキュラムの理解をより深める」こととし，1998年7月29日(水)と12月21日(月)いずれも1日のプログラムで開催した。メンバーの希望から次の4つのグループがつくられ，さらに各グループは，5～6人のメンバー編成でグループワークが行われた。

- 卒業時の特性からみたカリキュラム
- カリキュラムとその基本
- 実習科目群のカリキュラム
- 総合科目（対人関係論を中心に）

研修会は，メンバーがカリキュラムの理解に向けて集中して話し合う時と場のプロセスに重点をおいた。グループ討議過程や発表資料は，全員が共有する資料集としてまとめた。

［講演会］

日　時：1998年12月14日(月)　16:00～17:30　於）301教室

テーマ：USCF's Rsearch Center for Symputom Manegement

講　師：William L Holzemer, RN. PhD Profesor of UCSF

（小澤道子，豊増佳子，本田芳香）

# 日本看護科学学会第3回国際看護学術集会

1998年9月16日から18日までの3日間にわたり，東京国際フォーラムで日本看護科学学会が主催する「日本看護科学学会第3回国際看護学術集会」が開催された。

本学の教員は多くが学会員であり，会長を務められた小島操子大阪府立看護大学長が，本学在学中に企画を始めておられた関係で，学術集会の事務局を本学が担当してきた。

この学術集会のメインテーマは，『Innovation and Creativity Nursing into the 21st Century －21世紀への飛翔－』であり，今世紀を振り返り，21世紀に拡大する看護の役割を担うにはどう取り組むか，その方向性を探る学会であった。米国，フィンランド，オーストラリア，ROC（台湾），ネパール，フィリピンなど海外からの参加者約90名を含め，800人に及ぶ看護研究者が，種々のプログラムを通して討議した。

メインテーマを主軸として，21世紀の看護のあり方を文化的な側面あるいは科学性の側面などから多角的にかつ挑戦的に活発な討議が展開された。

今学会では，米国から特別招聘者としてオルソン博士をお迎えした。敗戦後の日本の看護の土台を築かれた博士からの我が国をはじめ全世界の看護婦に向けられたメッセージは，看護を担うこれからの世代の人々にとって大きな活力になったと思われる。

この学術集会の開催・運営に当たっては，本学をはじめ，国際医療福祉大学，杏林大学，千葉大学，日本赤十字看護大学の多くの学生がボランティアとして，その役割を十二分に果たして下さった。多くの方々の力の結集があってこそ，国際的に有意義な学術交流が実現できたのだと実感している。

日本看護科学学会第3回国際看護学術集会
事務局　庶務　小松浩子（成人・老人看護学）

# 海外の研究者との活動

## 1．Dr. William L. Holzemer の招聘について

本年もまた，私学振興財団の一部補助を得て，カリフォルニア大学（UCSF）からホルツマー先生を客員教授としてお迎えした（11月29日～12月19日）。修士課程および博士課程の研究法のクラスの他に，教員や院生の個人ガイダンスなど3週間のスケジュールはまたたく間に過ぎていく。今年は幸いなことに，クリスマスの集いと教員忘年会にも参加され，聖路加看護大学の行事にもすっかり馴染まれていた。

毎年，ホルツマー先生が来校されると，必ず1回は教員のためのワークショップを開くことになっている。今年も，12月14日（月）午後4時から5時半まで持つことができた。この折に，ホルツマー先生の最新の研究成果やUCSF看護学部の研究動向をお聞きすることになる。今年のテーマは，UCSF看護学部として取り組んでいるCenter for Excellenceの一環である，“Research Center for Symptom Management”について伺った。米国の看護系大学には，いくつかのテーマごとに，莫大な研究基金による研究プロジェクトCenter for Excellenceというのが置かれている。UCSFでは，家族看護，コミュニティーシステム，生理学的看護の3領域（department）から数名ずつ教員が集まって，症状管理の研究センターを構成し，症状管理に関する研究を学際的に，多角的に行なっているとのこと。がん，HIV，慢性呼吸器疾患などいくつかの疾患に顕著な症状を選び，各領域の教員が合同で研究を行なうのである。

もちろん，各教員は個別に自分の研究プロジェクトを持っており，また領域ごとのプロジェクトもあるので，こうした組織の枠をとりはらった構成は困難がないわけではない（研究費獲得と人材という点から）。けれども，ダイナミックな研究を実施していく上では，テーマ別の研究センター構想はいろいろ示唆するものが多くあったように思われる。将来的には，症状管理の研究成果にもとづいて，ケア実践のフィールドも研究センターの機関として位置づけていきたいとのことであった。

日本の看護系大学でも，新設校では独自の看護研究センターを付置しているところもある由。聖路加看護大学には，国際病院およびライフサイエンス研究所との有機的連携がすでにあるので，将来的な展望として，独自の研究センター構想を発展させることもできるのではないかと思った。

（博士課程研究法担当：羽山由美子）

## 2．Dr. Nancy C. Sharts-Hopko 来学に関して

聖路加国際病院再開発計画事業が完成し，5月22日㈮～24日㈰にかけて，記念式典等の行事が聖路加国際病院の主催によって開催され，本学も参加した。今回の記念行事には，米国聖公会聖路加メディカルセンターのアメリカン・カウンシルのメンバー全員が招待され，その一員であり看護部門の代表者であるVillanova大学看護学部教授，Nancy Sharts-Hopkoが来校された。

5月22日㈮には落成記念講演会が行われ，Dr. Sharts-Hopkoが“The Evolving Context of Health Care and Shifting Paradigms in American Nursing”というテーマで講演された。米国における医療経済とヘルスケア変革の概要，看護学や看護教育，看護実践また専門性に関する新たな示唆を含んだ内容であった。教職員，4年生，院生が参加した。

また今後の本学への援助に関し，Dr. Sharts-Hopkoと本学教員との協議，病院看護部及び本学との協議がもたれ，カリキュラム評価に関する専門家の派遣等が検討された。

（学部長：菱沼　典子）

# 1998年度マギル大学夏期語学研修報告

今年度のマギル大学夏期研修プログラムは７月31日から８月25日の３週間にかけて行われ，７名（１年１名，２年５名，３年１名）が参加した。本学のカリキュラムの都合上昨年度と同様７月31日まで前期試験があり，当日の午後の便での出発は教員にとっても学生にとっても大変慌ただしいものであった。来年度は試験日程の調整が望まれる。３週間の語学プログラムと，週末にはホームスティ，オタワ見学，トロント・ナイアガラ見学のカルチャープログラムが組まれ全員が参加した。

今年度は聖路加の学生７名だけで１クラスが構成されたため，授業のレベルが低すぎたと感じた学生もあったが，授業内容のトピックスは学生の関心のあるものとなり，授業に対する満足度は高い。語学力の進歩についてのアンケートでは例年通り，ほとんどの学生が話す力と聞く力の向上があったとしているが，達成度を計るテストでは大幅な伸びの見られた学生，ある程度の伸びの見られた学生，著しい変化がなかった学生が３分の１ずつとなった。

今年度も担当教師，モニターは大好評であり，モニター制度が本プログラムの一番よい点であると指摘した学生もいる。ただし，回を重ねるにしたがってホームステイの満足度に変化が出てきており，マギル側の受入先の調整の難しさを感じる。寮，食事についての満足度は例年通り高いものではなかった。全体としてコミュニカティブな英語能力の向上に加えて，複数文化でのさまざまな異文化体験は実りの多ものがあったと思われる。

（英語担当：助川　尚子，深谷　計子）